



いっしょに絵を見よう


 やまもと まこと
 山元 眞 神父

絵がとても上手なきようだ
 がある。上手という用語ごいが
 るので、「いい絵を描く」とでも
 言おうか……。お姉ちゃんは小
 学校五年生。低学年の頃から絵
 を描くのが好きで、絵画コンク
 ールではことごとく賞をなめつ
 くす……。といった感じ。小教区
 創立五十周年のポスターも描い
 てもらった。見る者が思わず微
 笑むような絵をいつも描く。

その子が五年生になったとき
 最初の懇談会で担任の先生に言
 われたそうだ。「もう五年生にな
 ったので、絵を描くひまなんか
 ありませんよ。勉強をしないと
 いけません……。」後日「虫歯予
 防週間」のポスターを見せに来
 てくれたとき、その話を聞いて
 開いた口がふさがらなかつた。
 こんなんじゃない、「美しい日本」に

なんかなりやしない!

日頃から気になってい
 がある。学校でよく言われる
 「主要科目」のこと。国語・算
 数・理科・社会。中学、高校に
 なるとこれに英語が加わる。だ
 れが、どういう理由で決めたの
 か。これらの科目が「主要」だ
 なんて……。人間形成の面から
 言えば、むしろ、音楽や美術、
 体育や家庭科のほうがよほど
 「主要」だと思ふのだが……。口
 では心の教育が必要などと言っ
 ているが、「主要科目」以外の科
 目は付属的なものと考えられ、
 行事のときなどには削られてし
 まう。

芸術やアートというと、なに
 か特別なことや特別な分野のよ
 うに思われているが、そうでは
 ない。芸術は真実の表現であり、

心の世界の表現である。芸術を
 通して人は真実、本物と出会う。
 芸術を通して人は心の世界を体
 験することができるのである。
 子どもの絵を見るとよく分かる。
 そこには子どもの心の世界が表
 れている。子どもは小さな芸術
 家。ありのままの真実を見て生
 きている。

毎年五月五日から十一日まで
 児童福祉週間が定められている。
 昨年は六十周年だったので、第
 二次大戦後に子どもたちの幸せ
 を願って定められたものだろう。
 しかし、子どもを取り巻く環境
 はますます劣悪なものとなって
 いるようだ。今年の標語は「見
 つけよう みんながもつてる
 いいところ」。全国公募による5
 000点あまりの応募作品の中
 から、沖縄の小学5年生の標語

が選ばれた。このような動きも
 そのときだけのもので、「週間」
 が過ぎると忘れ去られてしま
 う。思い返せば、先の「懇談会」の
 話を聞いたのはその時期だった。
 一年を通してこの標語を意識し
 ておきたいものだ。

小学生も高学年になると人
 的・物的環境が拡がってくる。
 人との付き合いも多くなり、そ
 れだけ悩みも増えてくる。教会
 に来ることもだんだんと困難に
 なってくる。サークル活動や塾、
 部活など、子どもたちもスケジ
 ュールの調整に追われる。多く
 の教会では、この時期に堅信の
 秘跡を受ける準備が始まる。小
 学校低学年での初聖体の準備は
 あまり難しくないが、堅信の準
 備のために子どもを集めるのは
 難しい。日曜日のミサ参加もい

ろいろな行事や部活の試合などで難しくなってくる。

「見つけよう みんながもってる いいところ」……教会でもこの標語を生かしたい。一人ひとりの人間はみんな違っていい。一人として同じ人間はいない。

「みんな ちがって みんな いい」とは、詩人金子みすずの言葉。国語の教科書にも載っている言葉で、みんなこの言葉はいいと思いがらも、実生活の中でそう思うのは難しい。教会に集まる子どもたちもいろいろな才能をもっている。すごい絵を描く子。音楽に秀でた子。足の速い子。チャレンジ精神豊かな子。詩をつくる子。本をよく読む子。感想文が得意な子。……みんな何かいいところがある。みんな違っていいからこそ、みんな「いい」。

よく教会が大事か、部活が大事か、教会が大切か、塾が大切か……という「設問」を聞くが答えは「どちらとも大事、大切」で、このような設問自体が間違っている。どちらも大切なもので、二者択一の簡単な問いでは

行橋教会祭壇横の具象画
ロンダニー二のピエタ（九十九伸一作／油絵120号）



ないと思う。こういう設問は問い掛けられた人の悩みを増す。

子どもたちに日頃から言っている。試合があるときも神さまのことを忘れてはいけないよ。与えられた力を精一杯出すことができるように「聖霊来てください」って祈るんだよ、と。頑張っている子がいたら教会でみんなに紹介したらいい。日曜日に大会があつてミサに来れない子がいたら、そのことをみんなに紹介して祈ってエールを送ればいい。賞を取ったら、みんなの前で褒めてあげればいい。これは差別することではなく、神さまを讃美することにつながる。子どもは自信をもち、さらに才

能を磨こうとするだろう。

子どもたちは報告に来る。「神父さん、優勝したよ!」「頑張ったけど残念ながら負けたよ」。ミサの前後、香部屋（準備室）でこのような会話がはずむ。一人の高校生はロボカップで全国大会に出場。同僚のチームが二位になり、アメリカの世界大会に行くことになった。

「見つけよう みんながもってる いいところ」……子どもだけでなく、わたしたち大人もこの標語を大切にしたい。福音的な集会である教会が、互いにすぐれたところを見て、神を讃美することができすように。悪口は教会には似合わない。

刻まれた光

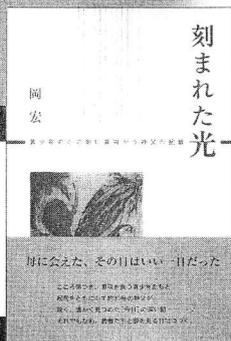
岡 宏・著

青少年の心の間に真向かう神父の記録

崩壊してゆく家庭・社会に捨てられ傷つき非行に走った若者たちと起居を共にし面倒を見続けて三十年。彼らの言動に仰天しつつも、そのいのちを信じ厳しく温かく注ぐ眼差し、そしてそれに応える若者たち。記録・講演に、彼らの座談会・インタビュー・体験記を加えた一冊。

四六並製・160頁・1,155円(税込)

- I 迷った若い旅人たちと
- II いじめる心、
いじめられる心
- III 表だけ見ないで、
裏に何かがあるかを…



女子パウロ会

〒107-0052 東京都港区赤坂 8-12-42 FAX 03-3479-3944 <http://pauline.or.jp/>